

グ症候群の患者では、治療による頭痛・疲労感の改善により、登校が可能となり、不登校の改善が認められた。これらの患者(学生)は、「症状のために登校できない」、「学校には行きたい」という訴えが主体であった。また、約3割の学生は、単独でのインタビュー・診察を強く希望し、これによる、症状の改善も認められた。

【結論】

1. 神経内科に通院する不登校の未成年者には、頭痛によるものが多い。
2. 頭痛・疲労の改善により、不登校も改善される例が多い。
3. 生活面でのストレスを把握する。自由な発言場所を与えることは症状の改善につながる可能性がある。

3 ホルター心電図を用いて比較した新規抗精神病薬がQT間隔に与える影響

渡邊 純蔵*・鈴木雄太郎**
 福井 直樹*・***・小野 信*
 須貝 拓朗*・澤村 一司**
 熊田 智****・鈴木 雄二*****
 染矢 俊幸*・**

新潟大学大学院医歯学総合研究科
 精神医学分野*
 新潟大学医歯学総合病院 精神科**
 医療法人青松会 松浜病院***
 県立精神医療センター****
 医療法人敬愛会 末広橋病院*****

【目的】抗精神病薬はQT時間を延長し、致死的不整脈であるtorsades de pointesを引き起こすことがある。QT間隔には日内変動があり、さらに薬物血中濃度に依存するため、標準12誘導心電図では測定タイミングによってQT延長を見逃しているおそれがある。そこで本研究では、24時間ホルター心電図を用い、新規抗精神病薬がQT間隔に与える影響につき検討した。

【対象と方法】対象は新規抗精神病薬単剤投与中の統合失調症患者で、研究内容について文書で十分に説明の上、書面にて同意を得られた35名と対照群19名。年齢は18歳以上65歳以下とし、

抗不整脈薬や三環系抗うつ薬の併用者、重篤な心疾患や心臓手術の既往歴のある者は除外した。ホルター心電図は、FM-120(フクダ電子)とSCM-6000(フクダ電子)とを用いて記録、解析を行った。年齢、血清K濃度、血清Mg濃度、QTc間隔、RR間隔を健常群と各薬剤群間で一元配置分散分析法を用いて比較し、Bonferroni法を用いて事後検定を行った。

【結果と考察】Olanzapine投与群が20例、risperidone投与群が11例、quetiapine投与群が8例であった。健常群と各薬剤群間で、年齢、男女比、血清K濃度、血清Mg濃度に有意差は認めなかった。1日投与量は、olanzapine群が23.3±8.5mg/日、risperidone群が5.1±2.6mg/日、quetiapine群が525±255mg/日であった。

ホルター心電図から Bazett の式で補正した15秒毎の平均QTc間隔を求め、この値の1日平均を健常群と各薬剤群間で比較したところ、risperidone群(431±25msec)は健常群(409±17msec)に比べ有意にQTc間隔が長かった(P=0.020)が、olanzapine群(412±20msec)とquetiapine群(424±13msec)のQTcは健常群との間に有意な差は認めなかった。健常群と各薬剤群間でRR間隔に有意差は認められなかった。以上より、ホルター心電図を用いた比較により、risperidoneはQT間隔を延長することが示唆された。

4 Quetiapine から aripiprazole への切り替えにより錐体外路症状が悪化したパーキンソン病の1例

小泉暢大栄*・渡部雄一郎*・湯川 尊行*
 染矢 俊幸*・**

新潟大学医歯学総合病院精神科*
 新潟大学大学院医歯学総合研究科
 精神医学分野**

【はじめに】Parkinson病(Parkinson Disease, PD)は、安静時振戦、筋固縮、動作緩慢、姿勢反射障害を臨床的な特徴とし、病理学的には黒質線条体のドパミン神経変性とLewy小体が認められ